

サクラを創ってきた 歴史を紐解く

企画部
研究専門員 吉丸 博志



写真1 東京都八王子市にある多摩森林科学園サクラ保存林。通年一般公開され、3月後半から4月後半にかけて様々なサクラの開花を見ることができる。



写真2 古い栽培品種、^{ふげんぞう}‘普賢象’。室町時代の将軍足利義満が京都の^{いんじょうにえんまどう}引接寺閻魔堂にあった普賢象というサクラの枝を所望したという記録が残されている。

森林総合研究所多摩森林科学園のサクラ保存林には、長い歴史をもつ伝統的な栽培品種や名木などの接ぎ木クローンが収集され、国内最大のコレクションとなつています（写真1）。1960年代に農林省（当時）の桜対策事業のひとつとして設立され、日本の伝統的なサクラ栽培品種を後世に伝え、さらに発展させるために、保全と研究を進めています。

サクラの栽培品種は、ヤマザクラ、エドヒガンやオオシマザクラなど野生種の突然変異や種間雑種で生じた美しい個体を、接ぎ木などのクローン増

殖技術によって代々保存してきたものです。古くから知られている栽培品種もあり（写真2）、特に江戸時代には多くの栽培品種が育成されました（写真3）。江戸時代末期までの文献には数百種類の名前が挙がっています。その後、明治維新における武家社会の崩壊と政治体制の激動の中で多くの種類が失われてしまいました。

長い歴史の中で取り

違えられたり、各地で異なる名前が付けられたりといった、いろいろな出来事があったと推測されるため、多摩森林科学園では収集にあたって、名前だけでなく由来などの履歴も極力記録しています。例えば、「三島の千里香」と「神代の千里香」はもともと「千里香」という同じ名前と呼ばれていましたが、由来が異なるので別の栽培系統として管理しています（図1）。近年、後の章で述べる履歴・形態・DNAを総合した研究手法により正確な識別と分類が確立し、

これらは異なる栽培品種であったことが判明しています。

多摩森林科学園には、現在約500栽培系統、1,300本のサクラが収集されています。サクラ栽培品種の正確な再分類の結果を整理して、「サクラ保存林ガイド」を刊行し、広く研究成果をお知らせしているところ（図2）。



写真3 江戸時代には非常に多くの栽培品種が育成され、その一部は現代にも残る。
「楊貴妃」、^{みくるまがえし}「御車返」、^{しょうげつ}「松月」、^{ぎょいこう}「御衣黄」（珍しい黄緑色のサクラ）。



図2 近年刊行した「サクラ保存林ガイド」。園内の配置図と主要な300栽培系統についての解説。書店、ネット書店、園内などで入手可能。

導入 1966 年 LK0069
導入元 静岡県三島市 遺伝学研究所
種類 サトザクラ ‘有明’
三島の千里香
Mishima-no-Senriko

導入 1967 年 LK0227
導入元 東京都調布市 神代植物公園
種類 サトザクラ ‘駿河台匂’
神代の千里香
Jindai-no-Senriko

図1 サクラ保存林の系統表示板。上は三島の遺伝学研究所から、下は神代植物園から導入し、ともに千里香と呼ばれていた系統。近年の形態・DNA解析により、それぞれの種類が^{ありあけ}‘有明’ および ^{するがだいにい}‘駿河台匂’ であることが確定した。

春の「桜前線」では1つの栽培品種である染井吉野の開花だけが注目されていますが、じつは多様なサクラが早春から4月下旬頃にかけて開花します。私たちの祖先が育んできた様々なサクラの開花の季節をゆつくりと時間をかけて楽しんでみてはいかがでしょうか。